

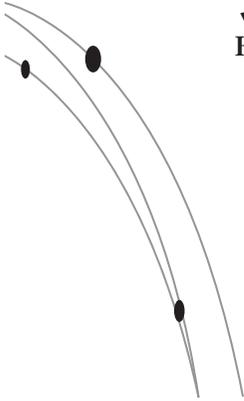
連載

フィールド・アイ Field Eye

プリンストンから——①

関西学院大学 西村 智

Tomo Nishimura



/// プリンストン大学の教育とリスク管理

2023年9月から1年間の予定で、アメリカにあるプリンストン大学で貴重な在外研究期間を過ごさせていただいている。受け入れ教員のRaymo教授をはじめとするプリンストン大学のスタッフの方々、貴重な時間を与えてくれた勤務先の同僚たちに心より感謝を申し上げたい。

さて、フィールド・アイは2回分を担当させていただくことになったが、1回目の今回は、雑駁になるが、プリンストン大学について印象に残ったことをいくつか綴ってみようと思う。

◆プリンストンについて

はじめに、街と大学について簡単に紹介したい。プリンストンはアメリカ東部ニュージャージー州にある、人口3万人ほどの小さな都市である。ニューヨークからは電車で1時間強、南西に下ったところにある。USセンサスによると、年間世帯所得の中央値は2650万円（全米中央値の約2.4倍）、不動産価格の中央値は1億3000万円（いずれも1ドル=150円で換算）とかなり裕福な市である（全米都市ランキング35位）。

プリンストン大学は街の中心的な存在だ。緑豊かなキャンパスの中にゴシック様式の建築物（校舎）が立ち並ぶ。中心にはステンドグラスが美しい教会や劇場もある。キャンパスを囲むように建てられているのは、石造りの寄宿舎だ（プリンストン大学は大学2回生まで全寮制）。まるでハリー・ポッターの世界だ。緑が眩しい芝生のベンチでは、学生たちがノートパソ

コンを広げて勉学に勤しんでいる。プリンストン大学が常に世界ランキングの上位をキープしているのは、優秀な教員と学生、最先端の研究が理由であるのはもちろんのだが、この美しい環境も無関係ではないのではないかと思えてくる。それに、街はとても小さく、ほとんどレジャー施設等の誘惑がないので、勉学に集中するにはうってつけの場所である。

◆大学院教育

まず、私自身が大学院教育についてのエキスパートではないことを断っておきたい。私が知っているのは、勤務先の日本の大学、博士号を取得したフランスの大学、そして、今回の滞在先のみである。もしかしたら、ここで私が見聞きしたことはトップレベルの大学では標準的なことかもしれないが、それでも非常に印象的だったので記しておこうと思う。

私が在籍しているThe Office of Population Research（以下、OPR）は、1936年に設立されたプリンストン大学の人口学研究センターで、人口学だけでなく社会学、経済学、生物学などの専門家が在籍している学際的な研究機関である。大学院を併設しており、博士号を取得することができる。OPR内に、教員の研究室、院生の研究室、事務スタッフのオフィスがあり、廊下では教員と院生がたわいない会話から研究相談まで立ち話をする姿をよく目にする。この物理的な距離の近さとフレンドリーな雰囲気がインクルーシブな環境をつくっている。OPRの廊下の壁には、額やポスターがセンスよく飾られている。実は、この額の中には、教員や院生がトップ・ジャーナルにパブリッシュした論文の1頁目が取められているのだ。苦勞して執筆した自分の論文が飾られると嬉しいだろうし、同級生の論文が飾られると焦るだろう。いずれにしてもよい刺激になっているに違いない。

学期中は、あちらこちらでセミナーが行われるため、さまざまな研究に触れる機会が多い。OPR内も毎週多くのセミナーがある。なかでも火曜日のランチセミナーは規模が大きく、ほとんどの人が参加する。国内で優れた論文を執筆している研究者をゲストに招き、昼食をとりながらの45分のトークと15分の質疑応答が行われる。研究内容はアルゴリズムを用いた最新の研究など刺激的でレベルが高い。こうした最先端の研究に触れる機会が日常的にある環境は素晴らしい。ちなみに、プリンストン大学は寄付が多いようで

資金が潤沢だ。ランチは大学によって提供される。フリーランチをお目当てに出席したところ、人生を変えるような素晴らしいトークに出会った、なんて学生もいるだろうか。

OPRのセミナーについて、とりわけ感心したことは、ゲストの紹介を院生たちに担当させていることだ。担当になった院生は、事前にゲストのバックグラウンドや研究について入念に調べ、紹介する準備をしているのだろう。セミナー当日は、多くの教員と学生が見守る中、緊張しながらも1分程度で要領よくゲストの紹介をする。どの研究機関で誰がどんな研究をしているかを知ることは、これからアカデミックの世界に入っていく彼らにとってよいエクササイズだ。さらに驚いたのは、質疑応答タイムである。司会の教員は、まず院生たちの質問タイムを設ける。数名が質問をする。それが尽きてやっと教員たちが質問をする。権威主義的な国ならば、まずは教員たちから質問を始めるだろう。そして、その時間が長いと院生が質問するチャンスはなくなる。しかし、ここでは院生が優先される。この大学がトップクラスの研究機関であると同時に、学生の育成に力を入れる教育機関だと実感した。

ランチセミナーについては潤沢な資金がないと真似できないが、壁の論文やセミナーの運営方法は、お金や手間をかけずに大学院生を育てる、合理的でよい方法だと思った。

◆大学のリスク管理

私のメールボックスには時々タイガー・アラートと呼ばれる通知が届く（タイガーはプリンストン大学のニックネームだ）。このアラートは、プリンストン大学に関係するすべての人の元に届けられる。アラートの内容は、例えば、悪天候時の出勤停止の有無について、SNS上で大学への脅迫があったこと、キャンパス周辺で起こった犯罪に関する情報（未遂も含めて）等である。印象的だったのは、その即時性と徹底した事前予防対策である。

ある時、キャンパス近くのコンビニで強盗未遂（学生が見知らぬ男に金を要求された）が起きた。そのわ

ずか3時間後には、私たちのもとに事件の詳細と容疑者の男の特徴が知らされた。翌日、男が逮捕されたことも知らされた。学生が学内のシャワールームを使用中に人の侵入があった時も早かった。容疑者も学生かもしれないのに、やはり、事件の詳細と容疑者の特徴を知らせる通知がきた。ここでは、個人のプライバシーや大学の体裁よりもキャンパスの平和が優先されるのだ。

むろん、ここまでの迅速な対応ができるのは、プリンストン大学内にパブリック・セキュリティと呼ばれる独自の部署があるからだろう。SWATチームの元司令官であるストローザ氏をトップに据えた警察さながらの組織である。アメリカではキャンパス内で銃撃事件が起こりうるとあってだろうか、セキュリティ対策のスケールが違う。ちなみに、多くのアメリカの公立大学はキャンパス警察を設置しているようだ。

ハラスメントなど不祥事対策についてもその徹底ぶりには目を見張るものがある。例えば、悪天候の時にもタイガー・アラートが送られてくるのだが、そこには必ず、「上司はやむを得ない理由で悪天候時に出勤できないスタッフに対して、可能な限りで柔軟に対応する必要がある」と書かれている。しつこいほどの事前予防的なパワハラ対策である。セクハラ研修は、客員研究員である私を含め大学にかかわる全員に義務づけられ、その対象範囲の広さに驚くが至極真つ当な対応だと思った。それというのも学内にいる誰が加害者になるかわからないからだ。日本の大学では、専任スタッフ以外にこういった負担を課すことを遠慮してしまう傾向がないだろうか。しかし、事件が起きてからでは遅い。リスク管理に遠慮は不必要であることを学んだ。

にしむら・とも 関西学院大学経済学部教授。最近の主な論文に“Cross-Country Comparative Study on Achievement of Desired Number of Children: With a Focus on the Impact of Child Education Expenses,” In S. Matsuda (ed.) *Low Fertility in Advanced Asian Economies*, Springer Briefs in Population Studies, Springer, Singapore (2020年)。労働経済学専攻。